C—30 衿構造の発達－陣羽織を資料として－

県立新潟女短大　○平　沢　和　子

目的　衿を作る立場から，衿の造形理論を得る目的で，衿の構造の違いに着目し構成要素の組成の違いによる三種の衿を設定した。この三種の衿はそれぞれ独立して矛盾なく成立し，しかも相互に原理的対立と関連を示していることを，現在までに考案された衿をすべてこの三種とその複合形に分類することによって明らかにした。今回は衿構造の自然史的発達過程の分析をこの仮定を用いて行い，その妥当性を検討し，これを分析の尺度として提案したい，理論は現在の衿の現象を説明し得るのみならず，過去の構成技術をも分析し得なければならないと考える。

方法　以上の仮定は西洋で発達した衿を用いて報告した。今回は日本で発生，発達，消滅した陣羽織８０領の衿を資料とし，衿の発達過程の分析をこの仮定を用いて行った。

結果　1)　陣羽織の衿は発達過程をたどると「立衿」「折り衿」「開き衿」と次第に複雑な構造の衿へと変化し，すでに「三基本形」が出現している。　2)　構成要素別に見ると「身頃衿つけ線」は直線から曲線へと変化が見られ，末期にはこれによる立体的な衿も見当る。「衿巾」は直線から曲線へと進み，更に曲線の多様化が見られ，立衿，折り衿，開き衿のこれによって生ずる変化が最も多い。「衿角度，衿腰，返り」の構成要素は直線裁断だけが見られ，従って初原の形を示し，意図的変化は見当らない発達段階である。
3)　今日のように発達した衿を意図的に予測して制作を行うための理論として認識すべき構造部分が明らかになった。即ち，美と不可分で連続的総体としてとらえられていた「衿角度」及び「衿腰」であり，その理論的分析が必要と思われる。